

特集

コレクションと〈あそぶ〉ことでみえるもの

名古屋市長美術館では、開館4年目の平成3年度から「夏休み子どもの美術館」という教育普及プログラムを開催し、夏休み期間中に美術館を訪れることもたちが自分の力で作品と向き合えるようになるための手助けとなる試みを数多く行っています。一つのテーマを複数の視点から掘り下げることが多く、昨年までに実施された企画は記録に残っているものだけでも86件、内容は親子向けギャラリートークからフレスコ画体験、ときにはダンスを取り入れた鑑賞ワークショップまで多岐にわたります。

もちろん他の博物館や公共施設においても夏休み期間中に子どもを対象とした講座は行われてきました。4～5年前からは法人化にともなって、大学が地域および近隣住民への貢献という趣旨で公開講座をさかに行うようになり、目にする広報物の数などからも年々その増加を実感しています。大学ならではの高度な技術や研究の紹介にとどまることなく、企業やNPOとのコラボレーションを試みたり、著名なアーティストを講師に招いたり、次々と新しいアイデアが繰り出され、何かと話題を集めているようです。

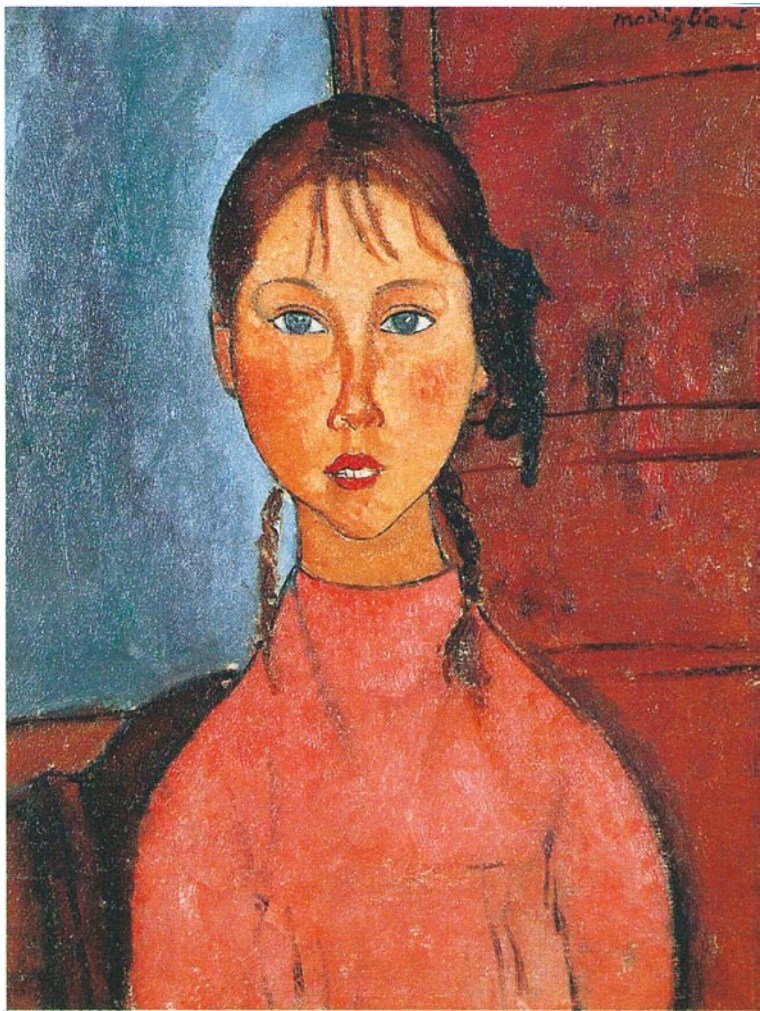
さて、再び当館で実施してきたプログラムに目を向けると、たとえば昨年実施した〈あそぶ〉というワークショップは、代表的な所蔵作品であるアメデオ・モディリアーニ《お

さげ髪の少女》(写真1)を題材に、絵の背景を描き変えてもらうという、ごくごくシンプルで誰もが気軽に参加できるものでした。教育普及プログラムは、本来その目的と成果によって評価されるべきものとはいえ、昨今の他施設における講座の百花繚乱ぶりに比べると地味であったことは否めません。

ただ、実施から約1年が経過した今、振り返ってみると、これまでに名古屋市美術館が手がけてきた数多くの教育普及事業のエッセンスと、今後の美術館のあり方や来館者との関係を考える上でのヒントが、このプログラムに含まれていた気がするのです。今回は過去に実施したプログラムを例にあげながら、美術館の教育普及活動が目指す方向性の一つについて、ゆるやかにお話します。

‘看板娘’は幸せか？

ここで改めて《おさげ髪の少女》をよく見てみることにしましょう。表情や姿勢、服装、髪型など、少女に関わる事柄を一通り観察した後で、今度は彼女のいる空間に目を向けてみてください。椅子に腰掛けた三つ編みの少女の、背景の左側に見える青みがかったグレーは薄暗い部屋の壁なのか、窓なのか。右側の茶色いものは部屋のドアなのか、家具なのか。詳しく観察すればするほど、私たちが



(写真1) モディリアーニ《おさげ髷の少女》 1918年頃

作品から知り得る情報はごくわずかで、キャンヴァスの大きさに切り取られた絵の中の世界をそれ以上確認することが出来ないもどかしさを感じるはずです。少女の胸像は縦長のキャンヴァスの中央に大きく配置され、いくぶん窮屈な印象を与えます。

一方、作品としての《おさげ髪の少女》は我が館のコレクションの目玉、看板娘と大事に扱われ、名古屋市美術館を訪れた来館者が見逃すことなどゆめゆめあってはならないと、常設展示室のエコール・ド・パリのコーナー、レンガ色の壁の中央が指定席。作者であるモディリアーニの大回顧展などの場合を除き、美術館を留守にすることはめったにありません。

ひとり窮屈な画面に固定された少女と、定位置に展示され自由に場所を選ぶことを許されない作品。二つの境遇が重なって見えたとき、ふと「おさげ髪の少女は一体どんな気持ちでいるのだろうか?」という考えが頭をよぎりました。館内での普段の状況なんておまけの情報を差し引いたとしても、少女の感情に思いを馳せることや、彼女の家族の存在や交友関係、性格や趣味などを想像してみること、画中の空間が果たしてどのような構造なのかを推測することは、そのまま《おさげ髪の少女》に関心を持って作品を鑑賞してもらうきっかけとなるのではないかと感じたのです。あまりの素朴な発想に驚かれるかもしれ

ませんが、プログラム〈あそぶ〉はここを起点にしています。

無言のコミュニケーション

実際にワークショップを進行する手順として、やはり作品を鑑賞してもらうことから始めました。複製図版を見ながら、おさげ髪の少女の表情やおかれている状況の詳しい観察を進めていく中で、参加者は想像をふくらませ、おさげ髪の少女の姿だけを印刷した画用紙を手に、それぞれ作業用のテーブルに向かいます。用意された水彩色鉛筆、クーピーペンシル、水性サインペン、クレヨンを使って自由に背景を描画してもらい、完成した作品は当日持ち帰ることを希望した人を除き、実施会場となった常設展示室3の壁に掲示してもらいました。(写真2)



(写真2)〈あそぶ〉実施風景

アートの旅「過去・現在・未来」

(彫刻家・名古屋市美術館参与)
石黒 鏑二

風景の中で その2 キュレーターの社会的位置

2007年夏のヨーロッパは、2年に1度のベネチア・ビエンナーレ、5年に1度のカッセル・ドクメンタ、10年に1度のミュンスター彫刻展という、10年に1度の大型プロジェクトが重なる年として大変な盛況であったと聞き、丁度10年前の夏、それらの3都市で繰り広げられたスターたちの競演を思い出した。

都市は、これらの一過性の大型イベントや、時にオリンピックや万博のような国際的大規模企画催事によりその様相を変える。そこでは、時の文化的潮流が主役を演じ、それらを具体化するアーティストたちの作品群が饗宴し彩りをつくる。そして場合により、それらは半恒久的にその場に残され、その余韻をいつまでも語り伝えてくれる。

それらの多くは、例えば1992年のオリンピック開催を経験したバルセロナで言えば、クレス・オルデンバーグやロイ・リキテンスタインなどの大型彫刻や、その迫力が通り全体を覆うエンリック・ミラーレスや、建築的スケールを持つフランク・ゲー

リーや、500メートルに及ぶ遠大な空間を意識したアグスティ・ロックなどの超大型作品が今も健在だし、一方道路に埋め込まれたルーサー・バウムガルデンの鑄鉄製の大字作品や、大地をえぐっただけで敬虔な空間を演出するカルメ・フィオルのような、誰も気づくことのないと思われる芸術操作まで手厚く保護され、19世紀中葉いわゆるモデルニスモ期と呼ばれる時代にイルデフォンソ・セルダにより拡大都市化された町並みと共存する。

余談だが、それを見た数年後、港に面したバルセロナータ地区の中心部の屋外の床面に埋められ並ぶ、マリオ・メルツのネオン・アートの管理不行き届きな状態を目撃し、帰国後「さすがに、ガウディやジョアン・ミロを生んだお国でも、現代美術が生き続けるのは大変だね」と、皮肉まじりの手紙を出したら後日、その熱いカタルーニャの血を引き継ぐ友人アーティストから「元通りになったよ」と、便りが来たのには驚いた。彼自身が市当局に掛け合った結果かどうかは知らない。

時代を演出し、都市に新しい息吹を創り出すのは誰か。それは地域が培う深い歴史認識と高い文化認識である。そして機会を見逃さずキュレーターやディレクターに、強い社会的信頼と地位を与える地域の知恵と勇気である。この便りがいろいろを教えてください。

展(34万人)、東山魁夷展(24万人)、開館記念展(13万人)、エルミタージュ美術館展(13万人)と、4つの展覧会が10万人越え、残りの展覧会でも、浅井忠展(3万3千人)、荻須高德展(5万8千人)、オーストラリアの現代美術展(1万8千人)と、すべて1万人以上であったことは、当時の文化状況として、「美術」全般に対する関心の高さが現れています。

当時、全国的にも珍しく現代美術の画廊が
ひしめきあっていた名古屋は「現代美術のメッ
カ」と呼ばれ、私たちも「名古屋には現代美術
のファンが1万人以上いるのだ」と心強く
思ったことを覚えています。しかし、バブル

経済が弾けて、経済不況が長引くなかで、美術館は「冬の時代」を迎え、画廊が閉鎖され、美術の文化的な地位は下がり続け、現在では、漫画(アニメーション)は言うに及ばず、ハリウッドに席巻されて瀕死の状態にあった映画にも抜かれてしまいました。

「冬の時代」どころか「氷河期」とも言える現在ですが、美術館は「冬眠」しているのではなく、分厚い氷の下で微かに動きはじめた新しい美術の動向に耳を澄まし、眼を凝らすことが求められているように思います。

名古屋市美術館にとって、新しい20年は、どのような時代になるのでしょうか。(sv)

時の話題

これまでの20年とこれからの20年

今から20年前、1988年の春、名古屋市美術館は開館しました。バブル経済が急速に膨れ上がっていた時期で、美術界も華やかな雰囲気には溢れていました。

開館年度には、美術館が総力を挙げて企画・実現した開館記念展「20世紀絵画の展開」を皮切りに、「東山魁夷展」「高野コレクション特

別出品 浅井忠展「ルノアール展」「エルミ
タージュ美術館展 フランス近代絵画の流れ」
「荻須高德遺作展」「今日のオーストラリア
美術展」まで、日本画から日本の近代洋画、
西洋近代美術の巨匠から現代美術にいたる、
多彩な展覧会を開催して、名古屋初の本格的
な近代美術館への期待と黒川紀章の新しい建
築への関心も相まって、入場者総数はほぼ
100万人(正確には985,061人)を数えました。
名古屋市の人口が約220万人ですので、ほぼ
半分の人々が(もちろん全国各地からも)来館
されたことになります。

展覧会毎の入場者数を見ると、ルノアール



(写真3)《おさげ髪の少女》(複製)と《あそぶ》参加者の作品

壁の作品が一点、また一点と増えるにつれ、《おさげ髪の少女》に対する来館者のさまざまな視点が形となり、参加者の様子にも変化があらわれました。最初は自分の作品を仕上げることに夢中だった子どもが手を休めて他の参加者の作品に入ったり、少し覗くだけで会場に入って来た一般の方から「自分も描いてみたいのですが」と声をかけられたり、自作を描き終わった参加者が常設展示室に向かい、熱心に本物を鑑賞する姿も見受けられました。ワークショップへの参加を希望した理由には単純に手を動かす楽しさも考慮に入れるべきでしょうが、参加者作品の鑑賞を通し

て来館者が他者の視点に興味を抱き、自分の感じ方、考え方との差異に刺激を受けるとともに、「自分はこう思う」という独自の見方を提示する行為を肯定的にとらえ、積極的になっていくのではないかと考えられます。〈あそぶ〉の参加者に芽ばえた変化は、以前から美術館において実施してきたギャラリートークの考え方に相通じるものがあります。それは、知識を豊富に蓄えた者が情報を一方的に教授するのではなく、複数で一つの作品の前に立ち、お互いの思うことを感じることを率直に述べ合うことから始め、対話(議論)を重ねることで一人では考えられなかった結論

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示 ①

何年にもわたる出品交渉が終わり、作品が確定し、カタログの準備もほぼ終了、ということになると、いよいよ作品を集めて会場で展示するという作業に入ります。実際に作品を集めるのは展覧会が始まる2週間から1週間前あたり、会場での展示はその後ということになりますが、担当する学芸員にとってはそれまでに積み上げた努力がようやく形になって現れる最も楽しい時期といえるかも知れません。

作品の運搬についてはトラックが使用されますが、海外からの借用となると当然飛行機(ごく希に船)がそこに加わることになります。移動する距離は国内でも数百キロ、海外からともなれば数千キロの長距離を移動することになりますから、その間大切な作品にもしもの事があってはいけません。作品を収める箱(クレートと呼びます)は、移動中の温湿度の変化や振動から作品を守るように細心の注意を払って制作されます。戦後間もない頃の展覧会では、学芸員自らがトラックを運転したり作品の梱包を行うような事も行われていたようですが、現在では梱包・運送・展示といった作業は専門の業者がこれを行い、学芸員はこれを監督するという具合に分業化が進んでいます。何事によらず分業化が進めば、それぞれの作業についての精度や水準はどんどん上がっていくはずで、作品を収めるク

レート一つとってみても大きな進歩を遂げています。クレートは基本的に木で構造が作られ、その中に発泡スチロールやウレタン、ゴムといった素材を詰めることによって緩衝や断熱を図りますが、最近のものはたいてい二重になっています。つまり、木の箱の中にもう一つ小ぶりの箱が入って、その中に作品を収める仕組みになっています。二重にすることによって温湿度や衝撃など、外部の影響をより小さくすることが可能になるわけです。そのため、クレートは作品の大きさに比べてしばしば何倍もの大きさになることがあり、届いた巨大なクレートを開けてみたら、えっ！こんなに小さな作品！と驚かされることもままあります。

以前ヨーロッパのある美術館から作品を借りた時、クレートが木製ではなく金属製だったことがあります。海外旅行に使うスーツケースを巨大にしたようなやつです。ジュラルミンのようなアルミ合金製のものだったと思いますが、軽く、丈夫で、熱にも強い優れたものである、と作品と一緒にやって来たクーリエが自慢気に話しておりました。しかも、このクレート、密閉製にも優れており、万が一飛行機が海上に墜落しても決して沈むことはなく後で回収することができるのだそうです。追跡用の発信装置が付いているのかどうかは聞き忘れましたが、盗難防止も兼ねて付けていた可能性は大いにありそうです。いずれ、太平洋の真ん中で救援電波を発信しながら波間に浮かんでいたゴッホの名作を、アメリカ太平洋艦隊の巡視船が無事救助、などというニュースが飛び込んでくるかも知れませんが(F)

術アカデミーを中心に、芸術が盛んな町としても知られています。こちらの美術館は、基礎となるコレクションが始まったのが1960年、現在の建物で美術館が開館したのが1986年と比較的新しく、しかも所蔵作品点数も約2,100点とそれほど規模が大きい訳ではありません。ところが、そのコレクションの圧倒的な質の高さで、ヨーロッパ屈指のものと知られるところなのです。

西洋近代美術の研究で知られる美術史家だった初代館長ヴェルナー・シュマーレンバッハ氏は、豊富な専門知識と圧倒的な鑑識眼をもって、世界中から選びに選んだ名画だけを購入しました。もちろん1960、70年代の美術市場の状況が現在とは違っていたということと、購入を支える州の財源によって可能だったこととはいえ、現在では、西洋近代美術の巨匠の展覧会を開催したいと思う美術館

を導き出す、そのプロセスを大切にしようというものです。当館のギャラリートークでは、半年間の研修を受けたボランティアが対話を進行する役割を担っていますが、〈あそぶ〉では壁に掲示された作品が橋渡し役となり、それぞれの「自分はこう思う」のやり取りが無言のうちに行われたとも言えるでしょう。

後日、「夏休みこどもの美術館」の様子を紹介する記録展示(写真3)を行った際にも、このやりとりは続いていました。すでに実施から2週間が経過しており、ワークショップを知らない来館者も多い中、《おさげ髪の少女》に対してどのような想像を広げ、何を思っ背景を描き変えたのか、来館者は作品を読み解きながら推測し、柔軟に楽しんでいたので。個々の楽しかった夏の記憶におさげ髪の少女を誘い込んだ作品、額縁でさえぎられた空間を想像して描き足した作品、少女の容姿を生かしたコスプレや、背景の色調を変化させることで作品全体の印象を変えようとした実験作など、企画者が当初予想していた以上に参加者の発想は豊かなもので、見る者を引き込むだけの力がありました。展示室に残された作品が実際に会おうはずのない来館者同士をつなぎ、それぞれの視点を共有している様子に、思いや考えを言葉でなく作品として形に残すことの良さ、そして展示によって多くの人々に触れる機会を提供することの利点を改めて思い知らされた気がしました。〈あそぶ〉の展示は、はからずも年齢も性別も異なる複数のワークショップ参加者と来館者によって自主的に行われた、言葉を媒介としない《おさげ髪の少女》の公開ギャラリートークとして機能していたのです。

それぞれをつなぐために

美術そのものの価値観がめまぐるしく変わり、美術と人との関わり方も多様になっていく中で、美術館に求められる役割も少しずつ変化しています。冒頭で触れたように、美術に関係のない施設や場所でアーティストが活

感想ノートから

「アメデオ・モディリアーニ展」

2008年4月5日(土)～6月1日(月)

展覧会の感想ノートには、作家や作品に対する率直な感想だけでなく、展示をした美術館に対するお褒めの言葉やお叱りの言葉も数多く綴られており、読むほどに励まされたり考えさせられたりします。開館20周年記念として開催した「モディリアーニ展」のノートにも様々な示唆に富む言葉が残されていました。今回はまずお叱りをいただいた点をご紹介します。今回の展覧会におけるお叱りの言葉はほとんど一点に集中しておりました。キャプションの文字の読みにくさです。今回の展覧会では作品を展示する壁に3種類の色を付けたのですが、いずれも濃い色であったため、半透明のキャプションの黒い文字が背後の壁の色に溶け込んでしまい読みづらくなってしまいました。実はこれは展示前からある程度予測していたことであり、キャプションの素材を不透明な白いものにすれば解決できるのですが、そうすると文字は読みや

動を行うことはすでに珍しいことではなく、作品を建物の中に押し込めて価値づけを行い展示・公開するという従来の美術館のあり方に対し、啓蒙的すぎるなどの批判的な意見も聞かれます。ただ、あらゆる多様性を許容するものとして美術が存在するなら、美術館がこの世からなくなることはないと信じたいのが学芸員の心情です。しかし、そのためにクリアすべき課題が多くあることも意識しています。

公的資金を運営費に充てて収集活動を行っている以上、公立美術館にはこの美術作品がなぜこの美術館にあるのか、どこに価値があるのか、などを説明する責任があります。調査研究によって明らかになった所蔵作品の価値を分かりやすく伝え、市民の美術に対する理解・関心を高める活動が教育普及といっても過言ではありません。だからといって教育普及活動の内容をコレクションに限定することは、あまりに頑なではないかと捉える向きもあるでしょう。近現代美術を扱う美術館であれば、常にアンテナを張りめぐらせ、新しい美術のあり方を市民に紹介していく先見性や柔軟性も必要ではないかとの指摘も十分に理解できます。

〈あそぶ〉は、数ある教育普及プログラムの中でも、当館のコレクションに親しみを持ってもらうための一企画にすぎません。けれども多くの参加者が残してくださった絵が《おさげ髪の少女》の新たな魅力に気づかせ、学芸員が改めて作品と向き合ってみようと思うきっかけになったことは、美術館は参加者の視点を知ることにより良い活動を展開できる、その可能性を示唆しているとも言えます。来館者とコレクション、来館者と来館者、そして来館者と美術館をつなぐものとして、どのような教育普及プログラムが相応しいのか。これまでの活動を見直し、また今後の美術をとりまく状況や地域性なども考慮しながら、柔軟に取り組んでいきたいと思います。(3)

すくなりますが、作品以上にキャプションが目立ってしまう可能性があり、悩んだ末に半透明な素材を選びました。展示デザインで何を優先するかは常に頭を悩ませるところですが、美術館側の意図を鑑賞者の方々に正確にお伝えする努力の必要性を痛感しました。

さて、お叱り以外の言葉の中から幾つかご紹介しましょう。現在50歳で鬱病のために休職中という方の言葉です。「私のような心の病で苦しんでいる人々に、このモディリアーニ展が立ち直りのきっかけとなってくれることを信じて、人生のプラス思考への転換のヒントを与えてくれたと、ありがたく思います」。本物の芸術だけが与えてくれる生きる喜びを作品の中に感じていただけたようです。あるいはこんなユニークなご意見も。「美術館は最愛の人と来るべし。ラブラブだと、画家のハートの部分がよくわかる」。なるほど。恋愛の高揚した気分ではしか味わえない世界というものが確かにありますね。本物を見て、見方が変わったという感想もたくさんありました。「目が無いのが嫌いだったのですが、ここでたくさんある絵を見ると、目がある絵は目ばかり見てしまいますね」。そうです、美術品はやっぱり本物に触れなくちゃ。また美術館で新たな発見をしてください。(F)

される西洋近代美術の名品の世界、ぜひご堪能ください。(hina)



ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館学芸員アネット・クルツィンスキ氏のインタビュー風景

展覧会 現在進行形

20世紀のはじまり

ピカソとクレーの生きた時代

K20ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館所蔵

2008年10月18日～12月14日

ドイツ西部の国内最大の商工業圏を形作る州の都デュッセルドルフに位置する「ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館」。一体どこにあるのか思い浮かばない方も多いかもしれませんが。デュッセルドルフといえば、ヨーゼフ・ボイスをはじめ20世紀ドイツ近現代美術の巨匠たちが教鞭をとっていた名門美

どこがおもしろい?!

今回ご紹介するのは小清水漸作こしみずすけ《夢の浮舟―赤い舟》に寄せられた来館者の方々の感想です。

「最初に見た時、なんでこんなところにイスが?と思ってたけど、題名を見たら《夢の浮舟―赤い舟》と書いてあって、コレ作品なんだ!!と思いました。なんでコレが舟なんだ??と思いながらも、やっぱり作家の人の想像ってすごいなあ～と思いました。うちらも、物を見る目を少し変えてみよっかなあ～、なんて思ったりもしました。」(清水さん 13歳)

「最初になかなと思いました。そしたら「赤い舟」と書いてあったのでびっくりしました!真中に水が入っていてふしぎです!!わたしがこの船に乗ったらしずむと思います。もしわたしがこの作品を作っていれば、「空とぶふしぎな赤いいた」と題をつけたいです!」(るなさん 10歳)

「私は、赤いお皿のように見えて、石の上に、おさがのってほとけさまにあげるように見えておもしろかったです。あと、船(ボート)のように見えました。海に浮かんでいるようでした。流されるようにも見えました。ゆったり、いやされる作ひんでした。わたしも、このような船にのってみたいです。」(こはこ 7歳)

「平安時代なかんじです。赤がすごく高貴な雰囲気で藤原氏の栄華を思わせるようです。水は池の水とかお酒みたいな意味でしょうか。」(sasaki-proさん 23歳)

「サーフボードかなあと思った。赤い杯かなあ



小清水漸 《夢の浮舟―赤い舟》1987年

とも思った。夜になるとネズミが集まってきて、パーティー?酒もりをするのですでした。」(?さん ?歳)

「この色はどこかで見た事がある、と思い、じっと見ていると、私の家にあるみそ汁の器でした。どこか親しみのある色で、懐かしい気持ちにもなります。また、作品にある凹凸は夕日の映る海のように見えます。この大きな舟に、どこまでも広がる大海原を想像することができました。」(野さん 16歳)

「上から水が落ちているのかと思い見上げてみたが、そうではなかった。舟なのに水が入っているところがおもしろい。きっと逆転の発想で空に浮かぶ。赤い色が好きです。」(satomikさん 21歳)

「舌に見える。水は塩辛いのだろうと思う。岩をなめて硬いものを鋭いものを舐めて丸くして塩辛い水で、洗ってしまうのだと思う。夢のように、簡単に。」(えりさん 20歳)

「塩水。私の夢はこの舟にはのりきらないなあ。」(?さん ?歳)

「水深くに岩場の深くに沈んでいたのが干上がったのか。水はだんだんと蒸発していって

もまだ水に沈むのか、それとも雨水がたまるのか。赤い舟にたまる水は夢なのでしょうか。いつか蒸発して消えてなくなる夢なのでしょうか。」(隅野さん 17歳)

「水が蒸発してうすく白いあとがのこっているところにひかれました。ゆらゆらと夢の中をただよう浮舟のはかない時間の流れを感じました。」(ぐろ子さん 17歳)

「横からしゃがんで見てみると、水面にいろいろなモノが映って、まるで世界のもうひとつの顔を見ているようでした。」(トオムラさん 19歳)

「なみなみと注がれた水が真赤な容器に入っている。すこしでもうごくとおふれてしまいそうな作品に、息を止め、目を凝らして見入ってしまいます。見る自分たちが、その様子を見て、緊張し、はりつめる気持ちが、その作品を完成させるのではないかと感じてしまいました。」(みみたぶさん 21歳)

鮮やかな朱色が印象的な《夢の浮舟―赤い舟》。どこか日本的な雰囲気を醸し出すこの朱色は水銀朱という塗料によるものです。朱色の舟形の素材は柎の木で、楕円の表面には鑿のぞか何かでつけられた彫りの跡が、さざなみのように拵はがっています。この彫刻には、水や石といった自然物がほぼそのままに用いられており、素材のもつ質感や特性に感じ入ることができます。形や構成がシンプルなものとどまっているため、ひとつひとつの要素が引き立ち、ものどうしのゆるやかな結びつきが様々な連想を可能にしてくれるのでしょう。「夢の浮舟」という言葉もまた、水や朱色と同じように、豊かな想像を誘う"素材"のひとつかと思います。(nori)

美術館Q&A

平成20年度の常設展について

今年度は開館20周年ということで、名古屋市美術館がこれまでに収集してきたコレクションの内容・構成を、よりわかりやすく紹介することを目的に、年間の展示計画を立案しました。皆さんもご存知のように、名古屋市美術館の収集方針には、4つの柱があります。まず、①郷土の美術ですが、名古屋という都市に存立する美術館として、この地方における美術・文化の歴史を保存、紹介していくことは重要な役割です。開館準備の頃から、

近代以降の名古屋における美術史を跡付けられるコレクションの形成に取り組んできましたが、今年度は常設展示室2で、「明治・大正の美術」から「昭和の美術」「戦後の美術」へと、時代順に作品を展示していきますので、年間を通してご覧になると、名古屋の美術史を展望することができます。この「郷土の美術」を代表する美術家として、荻須高德、北川民次、河原温、荒川修作、桑山忠明などがいますが、これらの美術家については、各時期の作品を系統的に収集していますので、「荻須高德とパリの日本人画家たち」「北川民次の芸術」「三岸節子の芸術」「河原温と1950年代の美術」「荒川修作と1960年代の美術」「桑山忠明と1970年代の美術」のように、その芸術の展開を顧みるとともに、同時代の作家たちとの影響関係を見せるテーマ展

示を設定しています。また、これらの美術家たちが活躍した時代と地域との関連から設定された収集方針として、パリを描き続けた画家・荻須高德との関係による②エコール・ド・パリ(モディリアーニ、シャガール、ユトリロ、キスリング、藤田嗣治など)、革命後の激動する時代にメキシコで活躍した北川民次との関連による③メキシコ・ルネサンス(オロスコ、リベラ、シケイロス、タマヨ、ポサダ、カーロなど)、第二次世界大戦後、海外に飛翔して、国際的に評価された日本人作家の代表である河原温、荒川修作、桑山忠明との関係から④現代の美術(ステラ、キーファー、アバカノヴィッチなど)があります。このように名古屋市美術館のコレクションは、「郷土の美術」を扇の要として、「エコール・ド・パリ」「メキシコ・

ルネサンス」「現代の美術」へと展開していったのです。そのなかでも「メキシコ・ルネサンス」は、日本で唯一のコレクションとして貴重なものであり、また常設展を輝かせる個性となっていますので、世界的に人気の高いカーロをはじめとした「メキシコの女性作家たち」、メキシコ壁画運動の三大巨匠たちを中心とした「メキシコ壁画の下絵と版画・写真」、メキシコの国民画家である「ポサダの版画」などの特集テーマで紹介します。このほかにも常設展示室3において、「生誕100年記念 田中君枝展」「名古屋の風景写真家たち展」「河口龍夫:DARK BOX 2008展」「新春日本画名品展」など、盛り沢山の常設企画展を開催しますので、特別展ばかりでなく、常設展も是非ご覧ください。(sy)

郷土の作家たち

森岡完介(もりおかかんすけ／1941ー)

独特の海岸風景を表現するシルクスクリーン作品を作り続けている森岡完介は1941年名古屋生まれ。64年、愛知学芸大学(現在の愛知教育大学)美術科を卒業後、知多市立八幡小学校、大府市立大府中学校、東浦町立北部中学校教諭として85年まで教鞭をとった。65年、桜画廊(名古屋)で初個展。森岡の作品が大きく変わるのは、73年、遠州灘の砂丘をモチーフにしてからである。森岡はそこで時間と共に変容していく海岸の風景を日没まで撮影し続けた。しかし、写真には、波や風の音、空気の動き、飛び交う砂粒や水蒸気は映らない。森岡は版のプロセスでそれを表現しようとしたのである。「砂目スクリーンを使う(自然も人も等質化する)、版の微妙なズレ(現実感の強調)、透明なインクの重ね刷り(厚みのあるマチエール)、明暗を反転させたポジとネガ(虚と実の世界)」などによって、独特の世界が成立することとなった。84年には、ベートーベンの楽譜を作品の下地に刷り込むことを始め、風の音と波の音が混然と画面にあふれ響くようになった。この間、77年には、第1回

現代日本版画大賞展で優秀賞、78年、第12回日本国際美術展で京都国立近代美術館賞受賞、83年には、'83現代版画in Nagoyaに出品し、また愛知県芸術選奨文化賞を受賞した。85年に義務教育での教員生活を終えた後、90年まで名古屋造形芸術短期大学で教鞭をとり、86年の第5回ソウル国際版画ビエンナーレ、88年、第12回クラコウ国際版画ビエンナーレなど、海外での受賞も相次いでいる。森岡の作品は、ありあまる情報に溺れそうになる現代人の日常における、自己の見つめ方について自問させられるものを持っている。環境破壊への警鐘という今日的な問題も含みながら、居場所を失いがちな現代人に対するより根源的な問いかけであろう。懐かしい、しかし、そう遠くない思い出に出会ったようであり、ぼつんと置かれた椅子は、現代人が個に戻って自問すべき場所である。(hmk)

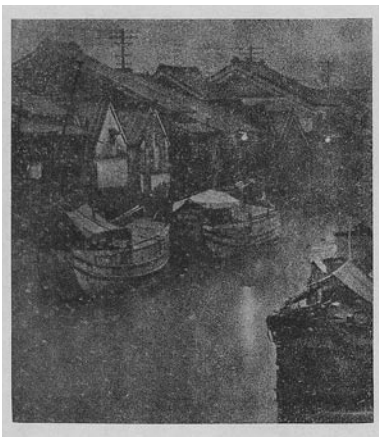


Beethoven at the beach-wind '96-5N 1996年 40.0×70.0cm 名古屋市長館

松浦幸陽(まつうらこうよう／1891ー1938)

日本の近代写真史、とりわけ表現としての写真を目指した「藝術写真」の運動の中で、名古屋で展開された〈愛友写真倶楽部〉の風景表現とは、1910年代後半当時の“時代精神”を象徴するものとして、全国の写真表現の指標となった。その中心は勿論、東浦・緒川の日高長太郎(1883ー1926)であったのだが、彼が目指した「写真の都!!名古屋たらしめたい」と言う夢の実現のためには、名古屋での拠点と人脈が絶対不可欠であった。拠点としては中区広小路にあった山本五郎商店に事務局が置かれたが、名古屋在住の写真家たちの求心的存在となったのが、当地の写真師・松浦幸陽(本名、市郎右衛門)である。小学校卒業後、名古屋屈指の営業写真館〈中村写真館〉に入門した松浦は、同館の技師長を務める傍ら、〈愛友写真倶楽部〉に、その設立の半年後1912(明治45)年4月に入会している。写真館の営業と個人的表現としての藝術写真という、相容れない要素を多分に持つ二つの分野に亘りながら、1916(大正5)年頃より、ゴム印画技法について独自の研究を始めた。ソフト・フォーカス・レンズによる描写とその確かなプリント技術によって、松浦等〈愛友写真倶楽部〉の五人(日高、大橋、益子、榊原、松浦)の表現は、「集団的な美事なピグ

メントの重圧」とまで称され、全国的にも「旭日昇天の愛知組の進出」と高く評価された。夜や霧の情景を好んだ松浦の作品は、逆光の表現に独自の境地を開拓した。自らの表現について「デリケートな調子を現すには空氣がなくっちゃいけない。」と語っていた。日高長太郎の急逝と、榊原青葉、益子愛太郎の相次ぐ退会の後も、審査員、更には顧問として〈愛友写真倶楽部〉を支え続け、その後「愛友」は、〈中村写真館〉での松浦の弟子でもあった三國庄次郎や海部誠也等に引き継がれて行った。その人望は、地元名古屋に止まらず、東京ではその死を惜しんで、追悼の集いが開催されたほどであった。[J.T.]



松浦幸陽 《雨の夜》1928(昭和3)年

展評

2008年6月14日(土)～7月27日(日)
愛知県美術館

誌上のユートピア

—近代日本の絵画と美術雑誌1889—1915

19世紀末から20世紀初頭にかけて、印刷技術の発達を背景に生み出された日本の美術雑誌を中心に紹介したこの展覧会は、大変豊かで充実した展示内容によって、近代日本の美術のひとつの側面を鮮やかに示してくれるものです。展示はまず、日本の美術雑誌に影響を及ぼした世紀転換期のヨーロッパの美術雑誌に始まります。『ユーゲント』や『ヴェル・サクルム』といった、当時最先端の美術雑誌を紹介しながら、そこに現れたユーゲント・シュティールの潮流が、「日本のアール・ヌーヴォー」として伝播する次のコーナーへと展開します。藤島武二や杉浦非水、橋口五葉などの装飾性を伴う画面からは微かな西洋の香りが漂うようで、当時の日本人が西洋に対して抱いた憧れもその中に包含していると感じさせます。そして、浅井忠と神坂雪佳の紹介、創作版画の活動に繋がった『方寸』を始め、様々な美術雑誌の紹介へと続くとともに、それらに関連する版画や油彩、日本画も併せて展示しています。展示全体を見て感じたのは、ここでは、雑誌やポスター、版画などのいわゆる「紙の作品」と油彩画とが一緒に展示されているけれど、「紙の作品」が意外な程に存在感を放っている、ということでした。この展示で明らかに

されているように、ユーゲント・シュティール、あるいはアール・ヌーヴォーの潮流が、「紙の作品」を通じて日本にもたらされているという点から見て、近代美術の中での「紙の作品」の位置を再認識させられる気がします。そして、「誌上のユートピア」という展覧会タイトルが示すように、紙に描かれた小さな世界の中に夢や憧れが沢山詰まっているようで、心楽しい気分になりました。最後に学芸員としてこの展覧会を見た感想として、企画された学芸員の方の好奇心と思いが挙げられます。ただ、お客さんが少ないのが残念に思えました。もっと、多くの方に足を運んで頂きたい展覧会でした。(akko)



橋口五葉《三越呉服店 此美人ポスター》 1911年
財団法人平木淳世絵財団蔵

イベントレビュー

モディリアーニ展
真野響子トークショー

2008年5月11日(日)

モディリアーニ展の会期半ばの5月11日、女優の真野響子さんにお越しいただき1時間半にわたってお話を伺いました。前号の『アートペーパー』に寄稿していただいた原稿をお読みいただければお分かりのように、真野さんは名古屋市美術館応援団のお一人として、これまで何度も当館にお越しいただいていますし、好きな作品の一つに《おさげ髪の少女》をあげていただいているように大のモディリアーニ・ファンでもあります。もともと好きだったモディリアーニに対する真野さんの関心が一気に高まっていったのは、20年ほど前のテレビの美術番組でのレポーターの経験でした。モディリアーニと恋人ジャンヌの足跡を丹念にたどっていった真野さんは、番組の終わり近く、二人の生涯への思いがあまりに切なく、感極まってしまった経験をお話ししてくださいました。以来、モディリアーニへ熱い視線を注ぎ続けて来た真野さんですが、その作品の見方は実にユニークです。真

野さんは単なる美術ファンではなく、作家や作品に対する知識の量も半端ではないのですが、決して知識に振り回されることなく常に自らの視点で作品と接し、その感動を私たちに伝えてくれます。なるほど、そんな見方があったのかと、快い驚きを覚えたのは私一人ではなかったでしょう。そしていくぶん早口で自らのあふれんばかりの思いを伝えようとするその姿には、真野さんの美術に対する情熱がみなぎっていました。モディリアーニについての話の中味の面白さもさることながら、これ程までに深く美術は人を魅了するのだ、ということをあらためて教えてくれるまたとない機会となったトークショーでした。(F)



CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

開館20年というので、今年度は本紙も折々特別編成になっていますが、今回はこの枠を横車で。

美術館が文化に益していないという人は、いまどきないように思います。でも、美術館がどう文化に益しているのか、具体的に思い描くのは容易ではないとも思えます。美術館は、先人が作りだした人類の宝を守り、後世に伝える役割を担っています。それだけで十分といえはその通り、異論のありようありません。ですが、守るのも伝えるのも、資源として活用するため。どう活かされているのかが問われるところです。

「文化」というと大仰ですが、私たちの日々の暮らしのなかで美術館はどんな存在なのか、そう考えると分かりやすくなるのではないのでしょうか。

20周年を締めくくる企画として、来春2月21日(土)から3月29日(日)まで特別展として「名古屋市美術館 20年のあゆみ」展を開催します。お気に入りの所蔵作品や名古屋市美術館にまつわる思い出などをみなさまからお教えいただき、私たちとともに展覧会を作っていた

だきたいと考えています。さまざまなかたちでこの展覧会にかかわっていただくことで、名古屋市美術館とともにあった20年を思い返していただく機会となることを願っています。現在、3つの企画を募集しています。応募は、12月14日(日)まで。詳しくは右の枠内をご覧ください。応募にはいずれも専用の用紙が必要です。用紙は名古屋市美術館のみで配布しています。「きてみてして」が、募集のキャッチフレーズ。面倒でも、名古屋市美術館に来ていただき、今一度美術館の現場や作品を見ていただく。参加は、その上で。

現場や現物を目の当たりにしなくても事が足りるいま、美術館という場所と美術作品というものの存在にあらためて触れていただきたい。その思いをみなさまが受け入れてくださると信じて、ご理解とご協力をお願いします。

名古屋育ちの私にとって、あるときまで、「美術館」は愛知県美術館でした。作品との出会いだけでなく、世事の片鱗をかすめた場所。今はないあの場所の記憶は、保たれています。はたしてみなさまに、名古屋市美術館はどんな体験と記憶をもたらしたでしょう。それらを分かち合えることを楽しみにしています。(み。)

展評

2008年5月29日(木)～7月3日(木)
ケンジタキギャラリー

アルフレッド・ジャー

Alfred JARR: Searching and searching

ギャラリーの床に設置された三基のライトボックスには水面を走るモーターボートのスクリーンによる波紋が映し出されている。スピードとともに快適なクルージングの臨場感さえ観る者に感じさせるその写真の裏側には、そうした開放的な風景とは全く対照的な、男や少年の肖像がある。ギャラリーの壁面に設置された鏡の反射により、観る者は初めて、風景の背後に見え隠れするそれらのポートレートに気づくことになる。これらのイメージは東シナ海に於いて、作家自身によって実際に取材・撮影された。作家によると、航跡は海上警備隊の監視船のそれであり、その背面で映し出されているのは、その領海を漂流しながら、香港へと亡命した“ポート・ピープル”と呼ばれたベトナム難民の肖像である。チリ、サンティアゴに生まれたアルフレッド・ジャー(1956～)は、ルワンダのキャンプや“ゴールド・ラッシュ”



Alfred JARR《Untitled (Water)》1990年



イベントガイド

■開館20周年記念「版」の誘惑展

7/5(土)～9/28(日)

国内外の優れた版画をはじめとして、「版」による表現を駆使した現代美術なども加えて、多様多彩な「版」による表現の面白さ、楽しさを紹介します。

○版画講座①「こうして木版画は刷られます」

7/20(日) 14時～

講師：磯見輝夫氏(版画家・愛知県立芸術大学学長) 企画展示室1 要入場券

○版画講座②「こうして展覧会は作られました」

8/10(日) 14時～

講師：山田諭(当館学芸員) 先着180名 無料

○版画講座③「mirror, touch—鏡よりモノタイプから絵画へ—」

9/7(日) 14時～

講師：設楽知昭氏(美術家・愛知県立芸術大学教授) 先着180名 無料

■コレクション解析学2008-2009

学芸員が当館のコレクションから特定の作品をとりあげ、その魅力などを紹介する講座です。先着180名 無料

に沸くアマゾン河奥地のセーラ・ペラーダ等を訪れ、難民や貧困等社会的テーマに取材した作品を制作している。セーラ・ペラーダの金山については、セバスチャン・サルガドの写真が有名だが、サルガドよりも早く同地を訪れていたジャーの表現には英雄的なイメージや、悲惨な状況を強調したりする意図は伺えない。例えば、ベトナムの少年は、カメラの前でハニカむ様を見せるものの、その表情はあくまで穏やかであり、どこか広告写真をも思わせる。ジャーの作品が注目され始めた1980年代後半、現代美術の世界では、写真や文字テキストに拠るメッセージや社会性の強い表現が現れた。だが、何気ない現実の風景に世界の構造を見せるジャーの手法と表現は、そうしたアートの“トレンド”や報道写真の一過性とは全く別趣のものとして展開してきた。そして何よりも特筆すべきは、その表現が対象と同じ“第三世界”からの視線によることである。[J.T.]

○第2回 7/27(日) 14時～
講師：山田諭(当館学芸員)
作品：三岸好太郎《海と射光》1934年
演題：真夏の海で何が起ったのか？
○第3回 9/28(日) 14時～
講師：保崎裕徳(当館学芸員)
作品：コンスタンティン・ブランクーシ《うぶごえ》1917年
演題：純化の呪術

■「キッズの日」+「おとなの日」
○なりきりアーティスト
9/21(日) 10時～12時
「つくって」楽しむプログラムです。対象：子ども(小中生)と大人(保護者) 参加費：小中生300円、大人(高大生)500円、大人(一般)600円 定員：10組 締切：8/31(日)
○アート・ウォッチング
10/25(土) 10時～12時
「よく見て」楽しむプログラムです。対象：子ども(小中生)と大人(保護者) 参加費：小中生100円、大人(高大生)300円、大人(一般)400円 定員：10組 締切：9/30(火)
※申込方法など詳しくはホームページをご覧ください。(T.Y)

◆「名古屋市美術館 20年のあゆみ」展
関連事業

開館20周年の締めくくりとして、2009年2月21日(土)から3月29日(日)まで、名古屋市美術館のこれまでの活動を振り返る特別展を開催します。展覧会は、市民のみなさまにご協力いただきながらつくられます。2008年12月14日(日)まで、以下の3つの応募を受け付けています。

1. 「わたしの1点」(お気に入り編)
名古屋市美術館の所蔵作品から、お気に入りの作品1点をお選びください。
2. 「わたしの1点」(ものがたり編)
名古屋市美術館の所蔵作品から「わたしの

1点」を選び、その作品にまつわる思い出などをご紹介ください。
3. 「わたしの美術館」
名古屋市美術館にまつわる思い出をご紹介ください。

応募は、専用の用紙にてお願いします。用紙は名古屋市美術館でのみ配布しています。(専用の用紙以外での応募は無効となります。ご注意ください。)詳しくは応募用紙のほか、ホームページ <http://www.art-museum.city.nagoya.jp>でも紹介しています。この機会に是非、名古屋市美術館へ足をお運びください。

【編集後記】

いよいよ、夏本番、また今年も名古屋の暑い夏がやってきます。といっても、この号の編集作業中は梅雨の真っ最中、じめじめと湿っぽい日が続いています。このところ、原油高騰の波を受けて、世間では物価高が問題となっていますが、その波は美術館にも例外なく襲ってきました。このところの厳しい予算状況に加え、紙代、印刷費の値上げ等々。何か方法がないかと議論を重ねた末、アートペーパーも今号に関しては何とかやりくりすることができました。ただ、今後も厳しい状況が続きそうです。いやいや、ピンチをチャンスに変えなければ。きっとまだ何か出来ることが見つかるはず。今年は名古屋市美術館開館20周年、これを区切りに、新たな気持ちでさらに頑張っていきたいと思います。さて、今号は、4月に来た広報担当の新メンバーも加わってのお届けです。また「20年のあゆみ」展では、名古屋市美術館や所蔵品にまつわる思い出などを募集しています。(上記参照)みなさまからのご応募、心からお待ち申し上げております。(hina)

アートペーパー第78号 発行日：2008年7月1日

発行 名古屋市美術館 [白川公園内]
<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄〔伏見駅・大須観音駅〕下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜(祝日の場合は翌日)

